

①

「明星」は東京新詩社の機関にして、先輩名家の芸術に関する解釈、論説、講話、創作（和歌、新体詩、美文、小説、俳句、絵画など）批評、随筆などを掲げ、傍ら社友の作物と文壇の報道を載す

（『明星』の規約より）

われらは墮落せる国民の嗜好を高上ならしめんがために、文学美術等の上より新趣味の普及せんことを願いて、雑誌「明星」を公にす。

（「新詩社」の清規より）

②

『みだれ髪』107番 初出 明星5号 明治33年8月

ゆあがりの みじまひなりて 姿見に 笑みし昨日^{きのふ}の 無きにしもあらず

③

『みだれ髪』77、 初出：明星 明治33年10月

ゆあみして 泉を出し やははだに ふるるはつらき 人の世のきぬ

④

「自分の処女の清らかな体を眺めると、我れながらほれぼれとして天上の少女のやうな誇りを感じる。此肌に人間の衣服に触れるのさへ自分を瀆すやうで心苦しい」

（与謝野晶子『歌の作りやう』、34ページ）

⑤

『みだれ髪』39 初出 『小天地』 1巻10号 明治34 8月

ゆあみする 泉の底の 小百合花 二十の夏を うつくしと見ぬ

⑥

『みだれ髪』 362 初出 『明星』 10 号 34 年 1 月

罪おほき 男こらせと 肌きよく 黒髪ながく つくられし我れ

⑦

『みだれ髪』 68 初出 『明星』 11 号 明治 34 年 3 月

乳ぶさをおさへ 神秘のとぼり そとけりぬ ここの花の 紅ぞ濃き

⑧

『みだれ髪』 221 初出 『明星』 13 号 明治 34 年 7 月

やれ壁に チチアンが名は つらかりき 湧く酒がめを 夕に秘めな

⑨

『みだれ髪』 321 初出 「明星」 12 号 明治 34 年 5 月

春みじかし 何に不滅の 命ぞと ちからある乳を 手にさぐらせぬ

⑩

『みだれ髪』 9 初出 『みだれ髪』

臙脂色は 誰にかたらむ 血のゆあぎ 春の思ひの さかりの命

⑪

『みだれ髪』 26 初出 「明星」 7 号 明治 33 年 10 月

やは肌の あつき血汐に ふれも見で さびしからずや 道を説く君